

開発 教育 ニュースレター



No. 44

1993. 9

リビア・ベンガレ市で

右後方は、政府直営の大スーパー

高橋 彰（東京都）

第11回開発教育全国研究集会 地域で育つ地球市民—開発教育の地域展開の可能性 於：長野県松本市

今年で11回目を迎える「開発教育全国研究集会」が、8月21(土)、22(日)日の二日間、長野県松本市で開催されました。テーマは「地域で育つ地球市民—開発教育の地域展開の可能性」。協議会発足以来、地方自治体による国際交流協会の相次ぐ設立や、外国人労働者の地域への流入など、地域における国際問題への関わりがかなり様変わりしてきました。地域において日常的に外国人、外国文化を理解する必要が出てきたと同時に、開発教育も首都圏の一部の人々が行っている状態から、広がっていくべき段階に来ました。こうした流れの中で、今年の研究集会は「地域」に焦点を当て、開催地も東京を離れ、松本で行うことになりました。

プログラム

- 8月21日(土)
10:30~12:00
開発教育入門講座「地球の仲間たちとともに」
講師：白井香里(開発教育を考える会)
13:00~13:20
開会式 挨拶：松下俱子(開発教育協議会理事)
13:20~14:50
パネルディスカッション
「開発教育の地域展開の可能性を探る
—なぜ今“地域”なのか—」
司会：田中治彦(岡山大学)
パネリスト：白戸洋(風土舎)
風巻浩(神奈川県立多摩高等学校)
15:00~17:30
課題別研究会
第1分科会「外国人と共に生きる地域社会づくりから」
発題者：川端真由美(アジアの花ヨメを考える会・なごの)
五十嵐京子(日本国際ボランティアセンター・山形)
榎井緑(大阪市社会教育委員会総団員)
第2分科会「環境問題へのアプローチ
—参加型学習プログラムの検討」
発題者：森 良(エコ・コミュニケーションセンター)
小貫仁(埼玉県立川越南高等学校)
第3分科会「学校は地域のなかで」
発題者：玉井製斐男(信州大学名誉教授)
和賀井稔(藤沢市立明治中学校)
風巻 浩(神奈川県立多摩高等学校)
第4分科会「開発教育の定義を再考する」
発題者：田中治彦(岡山大学)
赤石和則(東和大学国際教育研究所)

- 8月22日(日)
9:40~12:00 研究・実践事例発表
「開発教育の通年プログラムの試み」佐々木達也「ミナーのための開発教育を創ろう」和賀井稔「環境教育の出前授業」上條直美「ある多文化教育のかたち」木下理仁「心と森を育てるガールスカウトの森」鮎沢美知「牛乳パックがつながるネパールへの道」田幸哉「やろまいか!人づくり」佐藤恵理子「持続的な国家・世界経済発展のメカニズム」清水正能「NGOによる開発教育の実践」川口善行「地域の拠点づくりを旨として」重田康博

- 12:40~14:00
分科会報告と全体討議
14:00~14:20
閉会式
総括：金谷敏郎(園田学園女子大学)
挨拶：宮崎幸雄(開発教育協議会代表理事)

一日目は、「開発教育を考える会」の白井香里先生による「開発教育入門講座」から始まりました。学校教育の中でのスライドを使っての指導例や美術科での実先例を紹介されました。

続くパネルディスカッションは、岡山大学の田中治彦先生を司会に、長野県松本市に本拠を置く「風土舎」の白土洋氏と神奈川県立多摩高校教諭の風巻浩氏をパネリストに迎えて行われました。白土氏は、信州の地域活動のネットワークカーとしての立場で発言されました。一方、風巻氏は、多摩高校でボランティアサークルを指導しておられます。白土氏からは、開発教育の目的の根幹に「自分自身がどう生きるか」という問いがあるとすれば、自分からあまりかけはなれたところに目を向けず、一番近いところから手を付けるべきではないか、人に何かしてやるという姿勢でなく、開発教育に携わる一人一人が、自ら学習するという姿勢を持つべきではないかといった指摘がありました。風巻氏は、これまでの活動を振り返り、生徒たちに、自分の活動がささやかなりとも世界を変えることができるという自信を与えることが、学校教育において重要なのではないかとされました。パネルディスカッションは、時間的な制約もあり、パネリストの発表のあと質疑応答を行ってオープンな形で終了し、分科会につながりました。

4つの分科会が開かれました。第1分科会では「外国人と共に生きる地域社会づくりから」と題し、発題者が地域で行っている外国人(特に外国人花嫁)のケアについて活動を紹介しあいました。

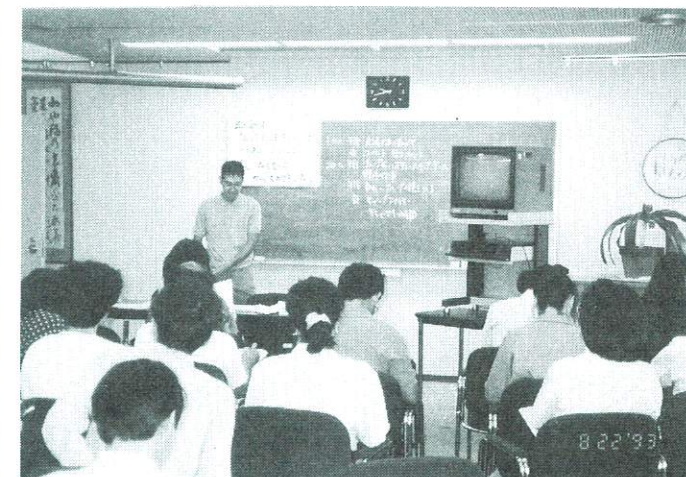
第2分科会では参加型の環境教育を実践してみるということで、グループごとに模造紙に身の周りのものの循環を絵にしていこうという作業を体験しました。

第3分科会は、学校が地域において果たす役割、学校での開発教育の取組を地域で生かすためにどうしたらいいかを話し合いました。

最も参加者の多かった第4分科会では、開発教育のイメージを参加者全員に紙に書いてもらい、そこから「開発教育」という言葉の定義についての討議を行いました。

全体討議では、「開発教育の地域展開の可能性を探る」という今回のテーマに基づき、地域ごとのグループに分かれ、行動する場としての地域で何ができるか、すべきかを話し合いました。地域の問題から世界を考えることも、世界の問題から地域に立ち返って考えることも共に重要なわけですが、どちらの視点に立つかで微妙な立場の差が出たのが今回の研究集会だったのではないのでしょうか。開発教育の地域展開は端緒についたばかりで、これから立場の差を縮めていくことが課題になるかと思えます。

尚、この研究集会の詳しい内容は、機関紙「開発教育」25号でお知らせします。



アジアの洪水禍とメディアの報道

日本が記録的な夏の雨量と低温に悩まされた今年、アメリカでも中西部に大洪水がおり、インド、バングラデシュ、ネパールなどからも洪水のニュースが伝わってきた。しかし国内の異常気象レポートやアメリカの洪水レポートがマスコミを飾った割には、アジアの洪水ニュースの頻度は少なかったし、扱いが小さかったことが気になった夏でもあった。

ネパールのヒマラヤ水系は今年の七月中旬に大洪水に見舞われ、ダムが決壊して数千人の死者が出たという。ダムは百年に一度の豪雨にも耐えられる設計だったというが、ある推計によると、七月の雨は千年に一度といっただけの大雨だったらしい。しかも森林の消滅が洪水を一段と大きくした。ネパールの森林減少率は、1975年からの十年間に年率で3%を超し、世界一位だったという。貧しさが森林の伐採を促進し、それが洪水被害を一段と大きくした。

読者の関心が低いから、どうしても発展途上国のニュースカバーが低くなるといわれるが、特にテレビによるアメリカの洪水レポートの派手な扱いと対照的なアジアの洪水ニュースが気になった。そういえば、やはり夏に小さく報道された黄河水系のダム決壊の詳細はまだ目にしていない。どこかできちんと報道されているのだろうか。

アジアのエイズ禍

アジアが今世紀末までにエイズ拡散の中心になるのではないかと心配されている。東南アジアではタイが、南アジアではインドがその中心とみなされている。

タイのエイズウイルス感染者は1992年末に40万人から60万人の間、インドでは60万人から300万人の間だろうと推定される。しかも増加の速度が異常に早い。タイでは1990年にウイルス感染者が二倍になったといわれたが、今日ではその倍以上になっている。

感染経路の最大のもは異性間性交で、それが性産業従事者によって媒介されているのは明らかだとされている。インドで初めてエイズウイルス保有者が発見されたのは1984年だが、それ以来、10万人とも30万人ともいわれるボンベイの性産業従事者の五分の一は感染者になっていると見られている。バンコクでも、バーガールやホステスの15ないし20%は、ウイルス保有者だろうという推定がある。女性が性産業に従事する最大の理由は貧困である。土地の男性が性産業を利用する理由のい

くばくかには、やはり貧困がある。エイズとの戦いは貧困との戦いでもある。

タイでエイズ検査、治療、血清検査などに要する医療金額は、1991年の170万ドルから2000年には6500万ドルにもなるだろうといわれている。それは直接医療経費だけで、エイズが及ぼす社会的な損害、たとえば労働人口の減少、病人の扶養、家族崩壊の経済的な影響などが、どれほどの金額に達するか、計算もされていないのが現状である。しかも西欧諸国ではエイズの治療費は公私の保険金で賄われるが、アジアでは原則として感染者自身かその家族が賄わざるを得ない。貧しさがエイズを広げ、それが一層人々を貧しくさせている。(資料はUNDPのCHOICES, 9月号から)

人権の普遍性

6月14日から2週間、オーストリアのウインで国連世界人権会議が開かれた。人権関係の900のNGOから約9000人も参加し、にぎやかだったようだ。そこでは、人権についての南北対立がひととき目立った。アジアのインドネシアや中国、マレーシアなどが、人権についての北側との認識ギャップを明確にした。これらの国は、国内の人権問題に他国が介入したり、政治的に利用したりすることに強く反発している。そして人権はその国の歴史的・政治的・文化的な文脈の中でとらえられるべきだと主張する。

一方には、人権問題を人権問題としてではなく、国際政策遂行の手段として取りだし、ゆさぶりの種にしようとする国があるものだから、なおさら人権についての南北の認識の違いが浮き彫りにされてくる。双方ともに政治的な思惑をこめて人権問題に対処しているので、人権の普遍性を論ずるのは、結果的に双方の作戦に引っかかることになるのかもしれない。

確かに人権の概念はヨーロッパ文明によって育まれ発展してきたものだが、近年の国際社会では発展途上国の主張も取り入れて、経済権の重要性を認識するようになってきている。だから、人権を国境を超える普遍的概念として認識することに異議はない。しかしそれが国際政治の手段として使われると、まったく別の様相を呈してくる。人権問題を改善しなければ最恵国待遇を付与しないと、国際機関加入を認めないなどと主張を聞かされると、貧困や悪環境が改善されなければ人権擁護を口にはできない、という主張も納得できるように思えてくる。みんなで考えてみませんか。

本の紹介

「Revise, Recycle and Recover —Realizing Our Resources—」

by Claudia E. Swain,

illustrated by Kevin Calhoun

A Frost Valley Publication

翻訳／東京YMCA

定価／1030円

1960年代から環境教育の理論と実践において、先駆的な役割を果たしアメリカのフロストバレーYMCAは、数年前にリサイクルの理念に基づき、キャンプ場のキッチンから出た残飯やごみなどを土に戻し(堆肥にして)、資源化する大規模な施設を造った。本書は、その資源管理センターを舞台に作られたものであり、Revise「考え直す」Recycle「リサイクル」Recover「回収する」という三つの章で構成されている。

第1章 Revise「考え直す」では、ごみ問題を概観し、ごみがどこからでるのかについての私たちの考え方を考えることをねらいとしている。

第2章 Recycle「リサイクル」では、子供たち自身が様々な「循環(リサイクル)」について調査し、自然界で起こっている循環を見分け、「消費後」の再利用の仕方を実験している。

第3章 Recover「回収する」では、衛生埋立地にかわる新たな方法である資源再生システムを探っている。

以上3つの章ではそれぞれ約10ほどのレッスンプランが紹介されている。レッスンプランには、対象となる生徒の年齢層が明記されており、その年齢相応の意識の変革をほどこすような内容となっている。

環境教育と開発教育とは別々に扱われることも多いが、基本的理念は共通していると思われる。なぜなら両者とも一つの地球という生命体に共存する人類というグローバルな視点を開かせることを一つの目的としているためである。

その意味で、このテキストは、環境教育のためだけでなく、開発教育に必要な「他者の問題を自分に関連づけて考える能力」を啓発する方法のつまった一冊であると言ってもいいであろう。というのも、環境問題を考察することは、自分と他者とのつながりを意識することから始まるからである。

「第一回アジア太平洋協力会議報告書」

日・米・韓・タイ

そしてアジア太平洋の人々が繋がった

発行者／地球市民の会

定価／1000円

本書は、1993年3月20日から25日の6日間4都市に及ぶ「第一回アジア太平洋協力会議」をまとめたものである。内容は、大きく2部にわかれており、第1部は「地球共感シンポジウム'93」での三つのパネルディスカッションと七つの分科会について。第2部は、「アジア太平洋経済セミナー」であり、アメリカ・タイ・日本・西サモアからの報告がなされている。

この会議で一環して訴えかけていることは、近代文明の方向性の過ちを、政治、経済、福祉、農業、伝統文化などの多様な視点から認識することにより、新たな「豊かさ」の価値基準に基づいた文明の潮流を創り出すことである。

参加者の顔ぶれは、国籍も職業も経歴も多彩であり、それぞれがいろいろなアプローチを提示している点が、興味深い一冊である。

開発教育協議会主催

第5回 開発教育ワークショップ

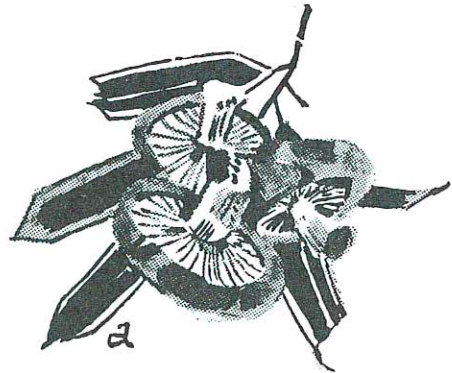
「もの」を使った開発教育

今年のワークショップでは、いくつかの国の生活にかかわる“もの”を集め、それらの“もの”の背景にある人々の暮らしを考え、異文化理解を深めながら、参加者全員で教材を作成します。とくに今回は、学校教育に限定されず、家庭や地域社会などの場でも幅広く利用できる教材を作ることがねらいです。

とき 11月12日(金)～14日(日)
※13日朝からの参加も可能
ところ 大学セミナーハウス(東京都八王子市)
定員 30名
参加費 16,000円(宿泊費、食費等を含む)
問合せ ☎03-3207-8085

開発教育協議会理事会・運営委員会の記録

理事会 8月22日 全国研究集会の反省など
運営委員会 7月12日 各チームの作業の報告
全国研究集会について
8月9日 全国研究集会の準備



テレビ番組のご紹介

協議会会員の風巻浩さん(神奈川県立多摩高校)から、次のような番組の紹介をいただきました。

番組名 小学4年社会科「くらし発見」
『日本でくらす』
放送日時 10月25日(月) 午前9:45～10:00
10月29日(金) 午前11:00～11:15
10月30日(土) 午前11:30～11:45
内容 多摩高校日本語ボランティアサークルが活動している「綾瀬こども学習室」のカンボジア人小学生の学校や家庭での生活

風巻さんから一言

小学校の先生で開発教育に関心のある方に、ぜひクラスで子どもたちに見せていただきたいと思います。生徒に感想文か、あるいはカンボジア人メアストール君への手紙を書かせてみていただければと思います。

風巻 浩 川崎市中原区井田三舞町92

ジャカルタ・スラムを考える会から

同じく協議会会員の和賀井稔さん(神奈川県)からは、インドネシア・ジャカルタのスラムで活動するNGOの人々と情報交換をした記録資料を、協議会会員の皆さんにも、現地の事情を知っていただくためにお分けしたいというお話がありました。

資料はB4版30頁です。

ご希望の方は、下記の住所あてに、返信用の切手250円分を同封して、連絡してください。

連絡先 和賀井 稔
〒252 藤沢市西俣野 62-5

新入会員

宮野寿美子(広島) 脇谷ジェシカ美智子(神奈川) 伊藤裕子(東京)
松本一子(愛知) 橋詰袈裟則(神奈川) 福原美紀(大阪) 古賀正則(神奈川)
兼田早智子(東京) 伊勢崎 功(千葉) 柴崎 聡(東京) 樋口未知留(東京)
松本 悟(P, D, R) 黒瀬義機(神奈川) 塩山清隆(大阪) 細田美香(東京)
石塚淳子(東京) 甲田 雅(神奈川) 矢嶋知江美(埼玉) 城戸崎雅美(東京)
浅沼早苗(神奈川) 中原真澄(東京) 能仁宏樹(三重)

継続会員

谷沢一江(東京) 甲斐田万知子(INDIA) 山西優二(東京) 吉原喜代(千葉)
#日本ユニセフ協会(東京) 石井由理(東京) 田頭明子(東京) 川上千春(福井)
吉良 直(東京) #東和大学国際教育研究所(東京) 岩佐ゆかり(東京)
瓜谷郁三(愛知) 岡田純爾(岡山) 奥田昭応(東京) 柴田栄子(埼玉)
杉浦豊子(東京) 高崎小枝子(東京) 中尾茂嗣(広島) 林 寿夫(広島)
牧野和幸(神奈川) 松尾通成(長崎) 長沼容子(東京) 鍋倉伸子(静岡)
富永幸子(埼玉) 杉原輝明(京都) 古賀黎子(福岡) 栗野 鳳(東京)
栗山元一(大阪) 木原三彦(埼玉) 上条直美(神奈川) 浅野ゆき(大阪)
ロニー・アレキサンダー(兵庫) 本多亜紀子(埼玉) 高橋 健(愛知)
#全国子ども会連合会(東京) #曹洞宗ボランティア会(東京) 松本 洋(東京)
上別府隆男(宮崎) 浜田麻利江(神奈川) 川島羊子(神奈川) 青木憲代(愛知)
#協力隊を育てる会(東京) 高山正代(千葉) 鈴木聖二(埼玉) 杉浦正和(千葉)
池ヶ谷洋美(静岡) 吉住知文(埼玉) #九州開発教育研究会(長崎)
中西珠子(東京) 藤村コノエ(神奈川) 木村宣子(広島) 栗原 豊(埼玉)
宇治川 秀(東京) アンセルモ・マタイス(東京) 川床靖子(東京)
井上優子(神奈川) 国際協力事業団(福岡) 神戸YMCA(兵庫)
江釣子真一(東京) 河内徳子(埼玉) 重 政子(神奈川) 富谷直子(東京)
荒木重雄(神奈川) 小貫 仁(埼玉) 中川哲夫(栃木) 吉田晴彦(山口)
大井智弘(埼玉) 徳山 薫(東京) 森山泰準(神奈川) 斉藤千佳(東京)
青木佐保(東京) 重富恵子(茨城) 巢瀬奈緒美(東京) 金子玲子(埼玉)
宮 順子(岩手) 中井 聡(東京) 羽田野真理(愛知) 内田 幸(東京)
新田ゆかり(埼玉)

以上、いずれも1993年6月28日～1993年8月24日受付分、敬称略、受付順

第13回世界食糧デー

食卓新紀行 食の生産者を訪ねて

上智大学を中心とする、大学生による研究発表。身近な食糧を通して、社会システムや日本と世界のつながり、南北問題、開発、援助、人権などについて考える。

- ①「家畜たちが語る地球環境と南北問題～それでもお肉はおいしいですか」
10月15日(金) 17:30～
図書館L-911
- ②「やきとり劇場～タイと日本を舞台に」
10月16日(土) 13:30～
図書館L-911
- ③「知っていますか フルーツのふる里～ミンダナオ島のプランテーション」
10月18日(月) 17:30～
図書館L-921
- ④「フィリピン・ミンダナオ島における日本のODA、人権侵害」
講師：青井千恵さん(助産婦)
10月19日(火) 17:30～
図書館L-911
- ⑤「特派員の見たカンボジア」
講師：庭野めぐみさん(日本テレビ)
10月20日(水) 17:30～
図書館L-911

ところ 上智大学(東京都千代田区)
問合せ 上智大学人間学研究室
世界食糧デーグループ
☎03-3238-3838

環境教育ワークショップ
環境共育の実践をめざして

小人数、グループ形式による実践型のワークショップ。「スキル・トレーニング/自然科学的アプローチ」「日本型の環境教育の実践について」「野外教育における環境教育」など。

とき 10月8日(金)～10日(日)
ところ 東京YMCA野辺山高原センター
(長野県南佐久郡川上村)
講師 川嶋直、ジョウハズキ、土谷隆
定員 50名
参加費 25,000円
(宿泊費、食費などを含む)
申込み 電話予約の上、申込書を送付する
☎03-3293-7011

開発教育入門ワークショップ

南北問題と子どもたち、南の世界の貧困と私たちとの関係を考える

- A「南の世界の子どもたちと、私たちの持つイメージ」
9月9日、11月11日
18:40～21:00
「グローバル・ピンゴ」「スリーキワード自己紹介」ほか
- B「貧困を生み出す構造と、NGOの活動について」
10月14日、12月9日
18:40～21:00
「食料格差～世界の食べ物のゆくえ」「1枚の新聞記事から～ストリート・チルドレンと私たち」ほか

講師 栗野真造
(国際子ども権利センター代表)
ところ 国際子ども権利センター
(大阪市北区本庄東 1-18-14)
参加費 500円
申込み ☎06-375-5466

国際理解講座「いたみ地球市民塾」

開発教育の参加型セミナー

- 9月7日(火) 10:00～12:00
「飢える子どもたちはどこにいるのか」
- 9月14日(火) 10:00～12:00
「南の世界の貧しさを生み出すもの」
- 9月21日(火) 10:00～12:00
「子ども権利条約を学ぶ」
- 9月28日(火) 10:00～12:00
「国際ボランティア活動の可能性」

講師 栗野真造
(国際子ども権利センター代表)
ところ 伊丹市立中央公民館
申込み ☎0727-84-8000
主催 伊丹市立中央公民館

タガログ語教室&フィリピン講座

講師 ジョイス・バラナック
(タガログ語担当)
ナンシー・サブク
(フィリピン講座担当)
とき 毎月第1・第3土曜日
19:00～20:30
ところ 上智大学内ホフマンホール
4階第5会議室
参加費 500円 テキスト代実費
主催 アジア・アフリカ・フォーラム
問合せ ☎0422-42-7564
(小川経一郎)

国際協力フェスティバル

10月6日の「国際協力の日」の記念事業。開発途上国の現状、文化の紹介や伝統音楽、芸能、シンポジウムなどが行なわれる。

- シンポジウム
- I「世界における日本の役割」(2日)
- II「明日からNGO」(2日)
- III「地球市民講座」(3日)

とき 10月2日(土)・3日(日)
ところ 東京・日比谷公園
(プレスセンターホール)
入場料 無料

※ 開発教育協議会後援事業

ワン・ワールド・フェスティバル

大阪で開催される「国際協力の日」記念事業。テントとステージで、さまざまな国際協力活動の展示、民族芸能、コンサート、異文化理解・国際理解のためのセミナーなどを実施する。

とき 10月17日(日) 雨天決行
ところ 大坂城公園・太陽の広場
問合せ ☎06-773-0256
(大阪国際交流団体協議会)

※ 読者の皆さんからの情報をお待ちしています。締切りは偶数月の15日。協議会事務局(ニューズレター係)宛にお送りください。

開発教育 隔月刊
1993年 9月1日発行 第44号
発行: 開発教育協議会
〒169 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-61
TEL: 03(3207)8085 (10:00～17:00)
FAX: 03(3207)0226
お願い: ファックスには必ず「開発教育協議会」と宛名を明記してください。
編集: ニューズレター編集チーム

編集室から……
■今年の全国研究集会は、協議会の本拠地、東京を離れての開催であったにもかかわらず、200人ちかい人々が参加し、とても賑やかでした。
■折しも「信州博」と「松本城400年祭」が重なって、電車は満席、車も大渋滞と、往きも帰りもたいへんでしたが、天気にも恵まれ、充実した集会でした。
■ただ、ひとつ残念だったのは、とくに最後の全体会で、時間が足りず、参加者どうしの十分な意見交換ができなかったことです。来年は、より多くの人と「出会う」ことのできる集会にしたいものです。
(K)
開発教育協議会は、開発教育の推進に関心をもち団体、個人であればどなたでも入会できます。会員の方には、協議会が発行する研究誌をはじめ、ニューズレターや研究集会・ワークショップ等のお知らせをお届けします。また、研究集会の参加費割引の特典もあります。会費、入会の手続き等、詳しくは協議会事務局までお問い合わせください。